
カージオイドラヴ

灰色のジアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カージオイドラヴ

【Nコード】

N4052U

【作者名】

灰色のジアン

【あらすじ】

極座標を使った告白の仕方と、その返事

受験生の夏の終わり。私は一人、学校の図書館に身を寄せている。放課後の図書館はいつも空席だらけだ。

それもそのはずで、節電の為に冷房は一切無し、大きく開け放たれた窓からは、吹奏楽部の騒音が絶え間なく聴こえてくるのだ。よほどの理由がなければ、ここで勉強をしようとは思わないだろう。でも、夕暮れが近づく頃には、残暑の熱さもひと気も引いて、後には風の音だけが残される。私はこの時間帯を愛おしく思う。

壁に掛けられた時計の針が、閉館の午後六時半を回ると、空は一気に昏くなるため、それはとても限られた瞬間である。私はペンをノートの上に置き、てのひらを胸にあてがう。制服ごしに感じる鼓動が、穏やかに、穏やかに、加速していた。

「ああ、霧島君。こんばんは」

いつも六時半きっかりに、声がかかる。

声の主は鴉藤先生。数学の先生で、三年四組の担任で、図書委員会の先生でもある。

先生はいつも白いワイシャツとベージュのスラックスという地味な格好で、図書委員会を担当するのはとても似合っている。

「こんばんは」

私は椅子から立ち上がり、返す。先生はあたりを見渡す。

「なんだ、今日も霧島君だけか。本たちも淋しいだろうな…ははは」
私は筆記用具を仕舞いながら聞いていた。顔を直視できなかった。でも、まだ暑いから仕方ないね」

云いながら先生はカウンターに歩いていく。私は広い机の端に置かれた本を持っていき、差し出す。

「あの、これ」

「はい」

先生は慣れた手つきで貸出カードを探し出すと、判を押す。そして、

「あ、あと、こちら。途中式も書いておいたよ」

と云って、折りたたまれたA4の紙をハードカバーの裏に挟む。

私は一礼し、図書館を出る。

「受験勉強おつかれさま」

先生の声が追いかけてきた。

「失礼します」

私はそつと云い、ドアを閉める。隙間から室内を盗み見ると、先生はカウンターに肘を載せて、窓の外を眺めていた。

暮れかかる廊下、図書室とドア一枚を隔てた場所で、私は解答を開く。

タイプライターで書いたみたいに几帳面な先生の字が、適度な余白を伴って並び、 n が5以上の整数であることを証明していた。

私は問題の解き方を一通り理解し、紙を胸ポケットに仕舞う。

なぜかしら、私は物足りなさを覚える。ううん。なぜ何もなかったぶん、私は知っている。そもそも私はこの問題の解き方を知っていた。数学はすっかり得意科目になった。私が知りたいのはもっと別のコト。

鴉藤先生。

本当は何歳なのだろう。30歳くらいというのは知っている。でも27なのか、28なのか。いずれにしても、私とは十年くらい違う。いつになったら、心は追いつけるのかだろうか。

授業中にとときどき見せる、哀しげな横顔は一体何なのだろう。

先生はすらりと伸びた長身を存分に活用して、黒板の上から下までぎっしり書く。丁寧な解説は、数学が苦手だった私にとってはありがたかったが、他の生徒たちには快く思われていないようだ。「手が疲れる」という不平はよく耳にするし、地味な印象と相まって、あまり人気の教師とはいえない。さすがに教師イジメということは無かるうが、理解されない孤独というか、数学の美しさを理解でき

ない生徒たちへの失望というか……。一人静かに胸を痛める鴉藤先生の姿は、何故か容易に想像できた。

私は数学がとても好きになったけれど、それでも先生のどこか浮世離れたような表情は変わらない。独身教師の哀愁。それを埋めるのが私の役目であれば、と願っても祈っても、やはり私と鴉藤先生は、一介の生徒と一介の先生なのだ。

先生、休日は何をしているんだろう。今みたいに、ぼーっと窓の外を眺めたり、数学の本を読んだりしているのかな……。

私は駅に向かう道の途中で、足を止めた。見上げるといつものコンビニがあり、私はそこで菓子パンを一つ買う。今日の分。私はすっかり冷めたアスファルトの上でそれにかぶりつく。甘く、やわらかく、胸につかえる食感。おいしさよりも、何よりも、質量の塊だけが、手の上に乗っかっている。

ふいに涙がこみ上げてきた。

私は、飲み込む、飲み込む、飲み込む。

租借した菓子パンを飲み込むたび、意味不明な涙があふれてきて止まらなかった。周りには人だつて歩いているのに。私は菓子パンを処理すると、ビニール袋をくしゃくしゃに握りしめて、早足に歩き出した。

もう、限界だ。

おやつだけじゃ、頑張れない。

その夜、私は人生で一番頭を使って、ラブレターをしたためた。

中には、愛しています、の一言と数式が一つ。先生が書く の範囲で、告白に対する返事が分かるようになってる。私なりに、精一杯ドラマチックなものにした。

分からない問題をカードに書いてやりとりする恒例のやりかたで、今日、そつとこれを渡す。

四限の数学の授業が終わると、慌ただしくなる教室を駆け抜けて私は先生の背中を追った。

「先生、これなんですけど…」

私はカードを差し出す。先生はいつも通りに受け取った。私は職員室に引き上げていく先生の後姿を感慨深く見つめていた。すると先生が歩きながら、折りたたんだカードを開くのが見えた。

まだ見ちゃダメ！ と内心叫んだのと、先生が小さく肩を震わせて立ち止まったのは、ほぼ同時だった。

伝わった。私は胸が張り裂けそうに緊張した。先生は背中では困惑していた。そして、一度も振り返らず、足早に去っていった。ああ、私は脱力する。

上の空で五限の授業を終えた私は、迷っていた。図書室、いかなくちゃ…。でも、足が震える。どうしよう、どうしよう。私は迷いに迷った拳句、そつとドアノブに指紋を重ねた。

「ああ、霧島君」

私は目を見開く。まだ時間はあるはずなのに、と思った。鴉藤先生は他に誰もいない図書室で、先に待っていた。

「こ、こんばんは」

「うん」

先生は真っ直ぐな眼差しで私を見据えている。

「これ…」

先生は立ち上がり、私に近寄る。私は俯き、まるで石になったように動けなかった。

「ごめんなさい。あの、変な事を…」

私は云う。云いながら、泣いてしまっていた。先生はゆるやかな手つきで解答を手渡そうとしたが、泣き始めた私を見て、それを手放し、代わりにハンカチを差し出した。薄茶色と薄緑の地味なハンカチだった。私は制服の袖で涙をぬぐい、何度も謝った。先生はうん、謝ることなんて何もないんだよ、と何度も私を慰め、椅子をすすめた。

結局、私は閉館時間まで泣き続け、そうしてとりあえず落ち着いてから、先生の解答を見た。

曲線が原点まで戻ってくることは無かった。半分だけ。片思いの心臓形。

「霧島君の気持ち、すごく、すごく嬉しいよ。でもやっぱり教師と生徒だからね、軸は横切れなかった」

先生は解説する。非の打ち所の無い解答だった。私はふと、そんな『届かなさ』に憧れていたのかな、などと虚しい心理分析をした。「霧島君は、もつといるんなものを見て、いるんなことを学んで、もつといるんな人を好きになってください。それが、若い学生の姿だと私は思います。これから受験で、特に現代は厳しい時代になったとは思うけど、霧島君なら、大丈夫ですよ……」

先生はそう云い、ぽんと私の頭を撫でる。そうやって子ども扱いするところに、反論したい気持ちが無かったわけではない。私は真剣に、対等な人間として心を埋めあいたかった。真剣に、しがらみを超えたかった。

けれど、チヨークの粉がついた先生の左手をぼーっと眺めていると、そんな青臭い想いを諦めることに、なんとなく決心がついてきた。

私は涙の最後の一滴を拭き、立ち上がる。勢いよく一礼し、満面の笑みを装って別れを告げると、逃げるように図書館を出た。

穏やかな空間を出ると、嘘のように静かな廊下が待っていた。

私は歩きながら、最後の解答を胸ポケットに仕舞う……。ふと、昨日のものがまだ入っていたことに気付いた。私はそれを広げ、今日の分と見比べる。いつまでも読んでいたい。けれど、そうするとまた泣き出してしまいそうだ。

「終わったわ。…次の問題を、解くのよ」

私はそう云い聞かせる。コピー用紙の過去は、形式的な一度きり

のキスをしてから、コンビニのごみ箱にそつと捨てた。

END

(後書き)

最後までお読みいただき、ありがとうございました。
ご感想をお待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4052u/>

カーゴイドラヴ

2011年6月27日13時10分発行